

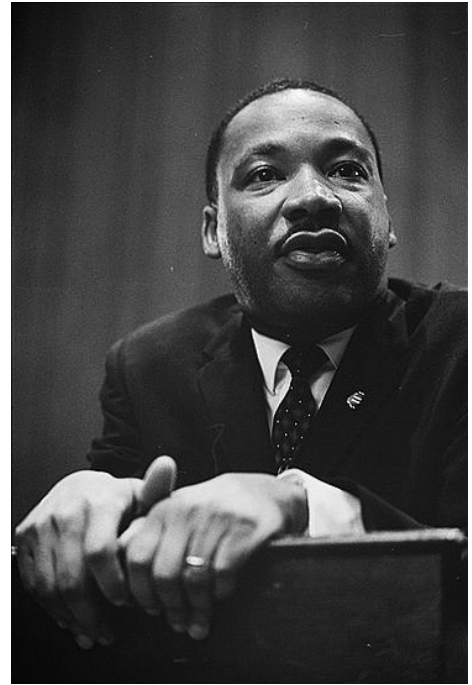
# 「私には夢がある」 (1963 年)

マーティン・ルーサー・キング・ジュニア

1963 年 8 月 28 日、職と自由を求めた「ワシントン大行進」の一環として 25 万人近い人々がワシントン DC に集結した。デモ参加者たちは、ワシントン記念塔からリンカーン記念堂まで行進した。そこですべての社会階層の人々が、公民権と、皮膚の色や出身などに関係なくあらゆる市民を対象とした平等な保護を求めた。

この日最後の演説者となったのがマーティン・ルーサー・キング・ジュニア博士だった。キングの行った「私には夢がある」(I Have a Dream) の演説は、独立宣言にも盛り込まれている「すべての人間は平等に作られている」という理念を網羅するものだった。あらゆる民族、あらゆる出身のすべての人々に自由と民主主義を求めるキングのメッセージは、米国公民権運動の中で記念碑的な言葉として記憶されることとなった。

その次の年、米国連邦議会は「1964 年公民権法」を通過させた。それは公共の場における人種分離を禁止し、公立学校・施設における人種統合を規定し、人種や民族に基づく雇用を違法とするものだった。同法は、南北戦争に続く「再建時代」以来、最も包括的な公民権立法だった。



マーティン・ルーサー・キング・ジュニア

---

今日私は、米国史上最大の、自由のためのデモンストレーションとして歴史に残ることになるこの集会に、皆さんと共に参加できることを嬉しく思う。

今から 100 年前、今日われわれがその人の象徴的な影の下に立っている偉大な米国民が、奴隷解放宣言に署名した。この極めて重大な布告は、容赦のない不正義の炎に焼かれていた何百万もの黒人奴隷たちに、偉大な希望の光明として訪れた。それは、捕らわれの身にあった彼らの長い夜に終止符を打つ、喜びに満ちた夜明けとして訪れたのだった。

しかしそれから 100 年の後、黒人は依然として自由ではないという悲劇的な事実、われわれは顔を向けなければならない。100 年の後、黒人の生活は、悲しいことに依然として人種分離の手かせと差別の鎖によって縛られている。100 年の後、黒人は、物質的な繁栄の広大な海に浮かぶ貧困の孤島で暮らしている。100 年の後、黒人は依然として米国社会の片隅で惨めな暮らしを送り、自分自身の土地にいながら、島流しになっている。そこで私たちは今日、この恥ずべき状況を劇的に訴えるために、ここに集まったのである。

ある意味で、われわれは、小切手を換金するためにわが国の首都に来ている。われわれの共和国の建築家たちが合衆国憲法と独立宣言に崇高な言葉を書き記したとき、彼らは、あらゆる米国民が継承することになる約束手形に署名したのである。この手形は、すべての人々は、白人と同じく黒人も、生命、自由、そして幸福の追求という不可侵の権利を保証される、という約束だった。

今日、その有色人種の市民に関する限り、米国がこの約束手形を不渡りにしていることは明らかである。この神聖な義務を履行もせずに、米国は黒人に対して不良小切手を切った。その小切手は「残高不足」の印をつけられて戻ってきた。

だがわれわれは、正義の銀行が破産しているなどと思いたくない。この国の可能性を納めた大きな金庫が資金不足であるなどと信じたくない。だからわれわれは、この小切手を換金するために来ているのである。われわれの要求に応じて、自由という財産と正義という安全を受け取ることができるこの小切手を換金するために、ここにやって来たのだ。われわれはまた、現在の極めて緊迫している事態を米国に思い出させるために、この神聖な場所に来ている。今は、冷却期間を置くという贅沢にふけったり、漸進主義という鎮静薬を飲んだりしている時ではない。今こそ、民主主義の約束を現実のものにする時だ。今こそ、人種分離の暗く荒廃した谷から、日の当たる人種的な正義の道へと上がる時だ。今こそ、われわれの国を、人種的な不公正の流砂から、兄弟愛の揺るぎない岩の上へと引き上げる時だ。今こそ、すべての神の子たちにとって、正義を現実とする時だ。

現在の緊急事態を見逃したり、黒人の決意を軽く見たりすることは、この国にとって致命的だろう。黒人たちの正当な不満に満ちたこの酷暑の夏は、自由と平等の爽快な秋が到来しない限り、立ち去ることができない。1963年は、終わりではなく始まりである。黒人はたまっていた鬱憤を晴らす必要があったただけだから、もうこれで満足するだろうと期待する人々は、米国が元の状態に戻ったならば、不快な現実をいきなり突き付けられることになるだろう。黒人に公民権が与えられるまでは、米国には安息も平穏が訪れることはない。正義の明るい日が出現するまで、反乱の旋風はこの国の土台を揺るがし続けるだろう。

しかし私には、正義の殿堂の温かな入り口に立つ同胞たちに対して言わなければならないことがある。正当な居場所を確保する過程で、われわれは不正な行為を犯すことがあってはならない。われわれは、敵意と憎悪の杯から飲むことによって、自由への渇きをいやそうとしないようにしよう。

われわれは、絶えず尊厳と規律の高い次元での闘争を展開していかなければならない。われわれの創造的な抗議を、肉体的暴力へ堕落させてはならない。われわれは、肉体的な力に魂の力で対抗するという莊厳な高みに、何度も繰り返し上がらなければならない。信じがたい新たな闘志が黒人社会全体を包み込んでいるが、それがすべての白人に対する不信につながるものがあってはならない。なぜなら、われわれの白人の兄弟の多くは、今日彼らがここにいることから証明されるように、彼らの運命がわれわれの運命と結び付いていることを認識するようになったからである。また、彼らの自由がわれわれの自由と分かち難く結び付いていることを認識するようになったからである。

われわれは、たった一人で歩くことはできない。

そして、われわれが歩くさいには、前方へ前進することを誓約しなければならない。

引き返すことはできないのである。

公民権運動に献身する人々に対して、「あなたはいつになったら満足するのか」と聞く人たちもいる。われわれは、黒人が警察の暴力の言語に絶する恐怖の犠牲者である限りは、決して満足することができない。われわれは、旅に疲れた重い体を、道路沿いのモーテルや町のホテルで休めることを許されない限り、決して満足することができない。われわれは、黒人の基本的な移動の範囲が、小さなゲットーから大きなゲットーまでである限り、満足することができない。われわれは、われわれの子どもたちが、「白人専用」という標識によって、自我をはぎとられ尊厳を奪われている限り、決して満足することができない。ミシシッピ州の黒人が投票できず、ニューヨーク州の黒人が投票に値する対象はないと考えている限り、われわれは決して満足することができない。そうだ、決して、われわれは満足していないのだ。そして、正義が川のように流れ下り、公正が力強い急流となって流れ落ちるまで、われわれは決して満足することがないだろう。

私は、今日ここに、多大な試練と苦難を乗り越えてきた人々が、あなたがたの中にいることを知らないわけではない。刑務所の狭い監房から出てきたばかりの人たちも、あなたがたの中にいる。自由を追求したために、迫害の嵐に打たれ、警察の暴力の旋風に圧倒された場所から、ここへ来た人たちもいる。あなたがたは創造的な苦しみベテランである。これからも、不当な苦しみは救済されるという信念を持って活動を続けてほしい。

ミシシッピ州へ戻れ、アラバマ州へ戻れ、サウスカロライナ州へ戻れ、ジョージア州へ戻れ、ルイジアナ州へ戻れ、そして北部の都市のスラムやゲットーへ戻ってほしい。きっとこの状況は変えることができるし、変わるだろうということを信じて。

絶望の谷間でもがくことをやめよう。友よ、今日私は皆さんに言っておきたい。

われわれは今日も明日も困難に直面するが、それでも私には夢がある。それは、アメリカンドリームに深く根ざした夢である。

私には夢がある。それは、いつの日か、この国が立ち上がり、「すべての人間は平等に作られているということは、自明の真実であると考える」というこの国の信条を、真の意味で実現させるという夢である。

私には夢がある。それは、いつの日か、ジョージア州の赤土の丘で、かつての奴隷の息子たちとかつての奴隷所有者の息子たちが、兄弟として同じテーブルに着くという夢である。

私には夢がある。それは、いつの日か、不正と抑圧の炎熱で焼けつくかばかりの砂漠の州、ミシシッピでさえ、自由と正義のオアシスに変身するという夢である。

私には夢がある。それは、いつの日か、私の4人の幼い子どもたちが、肌の色によってではなく、その人格の中身によって評価される国に住むという夢である。

今日、私には夢がある。

私には夢がある。それは、邪悪な人種差別主義者たちのいる、州権優位や連邦法の無視を主張する州知事のいるアラバマ州でさえも、いつの日か、そのアラバマでさえ、黒人の少女少女が白人の少女少女と兄弟姉妹として手をつなげるようになるという夢である。

今日、私には夢がある。

私には夢がある。それは、いつの日か、「あらゆる谷が身を起こし、あらゆる丘と山に身を低くさせよ。荒地が平らにされ、曲がった道がまっすぐにされ、そして神の栄光が啓示され、生きとし生けるものがその栄光をともに見ることになる」という夢である。

これがわれわれの希望である。この信念を抱いて、私は南部へ戻って行く。この信念があれば、われわれは、絶望の山から希望の石を切り出すことができるだろう。この信念があれば、われわれは、この国の騒然たる不協和音を、兄弟愛の美しい交響曲に変えることができるだろう。この信念がある限り、われわれは、いつの日か自由になると信じて、共に働き、共に祈り、共に闘い、共に牢獄に入り、共に自由のために立ち上がることができるだろう。

まさにその日にこそ、すべての神の子たちが、新しい意味を込めて、こう歌うことができるだろう。「わが国よ、そなたのために、うるわしき自由の地よ、そなたのために、私は歌う。わが父祖たちの死せる大地、巡礼者の誇れる大地、あらゆる山腹から、自由の鐘を鳴り響かせよう」

そして、米国が偉大な国家たらしめるならば、この歌が現実とならなければならない。そこで、ニューハンプシャーの美しい丘の上から自由の鐘を鳴り響かせよう。ニューヨークの力強い山々から、自由の鐘を鳴り響かせよう。ペンシルベニアのアレゲニー山脈の高みから、自由の鐘を鳴り響かせよう。

コロラドの雪に覆われたロッキー山脈から、自由の鐘を鳴り響かせよう。カリフォルニアのなだらかな曲線の峰から、自由の鐘を鳴り響かせよう。

だが、それだけではない。ジョージアのストーンマウンテンからも、自由の鐘を鳴り響かせよう。

テネシーのルックアウトマウンテンからも、自由の鐘を鳴り響かせよう。

ミシシッピのあらゆる丘と塚から、自由の鐘を鳴り響かせよう。そしてあらゆる山腹から自由の鐘を鳴り響かせよう。

自由の鐘を鳴り響かせよう。これが実現するとき、そしてわれわれが自由の鐘を鳴り響かせるとき、すべての村やすべての集落、あらゆる州とあらゆる町から自由の鐘を鳴り響かせるとき、われわれは、その日を早めることができる。すべての神の子が、黒人も白人も、ユダヤ教徒も異教徒も、プロテスタントも

カトリック教徒も、手をつなぎ合い、なつかしい黒人霊歌を歌うことのできる日である。「ついに自由になった！ついに自由になった！全能の神に感謝しよう、われわれはついに自由になった！」

---

配布に関する説明：1999年5月26日、Douglass Archives of American Public Address (<http://douglass.speech.nwu.edu>)の一部として受理。作成：D. Oetting (<http://nonce.com/oetting>)。

---

## I Have a Dream (1963)

Martin Luther King Jr.

I am happy to join with you today in what will go down in history as the greatest demonstration for freedom in the history of our nation.

Five score years ago, a great American, in whose symbolic shadow we stand today, signed the Emancipation Proclamation. This momentous decree came as a great beacon light of hope to millions of Negro slaves who had been seared in the flames of withering injustice. It came as a joyous daybreak to end the long night of their captivity.

But 100 years later, the Negro still is not free. One hundred years later, the life of the Negro is still sadly crippled by the manacles of segregation and the chains of discrimination. One hundred years later, the Negro lives on a lonely island of poverty in the midst of a vast ocean of material prosperity. One hundred years later, the Negro is still languished in the corners of American society and finds himself an exile in his own land. And so we've come here today to dramatize a shameful condition.

In a sense we've come to our nation's capital to cash a check. When the architects of our republic wrote the magnificent words of the Constitution and the Declaration of Independence, they were signing a promissory note to which every American was to fall heir. This note was a promise that all men—yes, black men as well as white men—would be guaranteed the unalienable rights of life, liberty, and the pursuit of happiness.

It is obvious today that America has defaulted on this promissory note insofar as her citizens of color are concerned. Instead of honoring this sacred obligation, America has given the Negro people a bad check, a check that has come back marked "insufficient funds."

But we refuse to believe that the bank of justice is bankrupt. We refuse to believe that there are insuffi-

cient funds in the great vaults of opportunity of this nation. And so we've come to cash this check, a check that will give us upon demand the riches of freedom and security of justice. We have also come to this hallowed spot to remind America of the fierce urgency of now. This is no time to engage in the luxury of cooling off or to take the tranquilizing drug of gradualism. Now is the time to make real the promises of democracy. Now is the time to rise from the dark and desolate valley of segregation to the sunlit path of racial justice. Now is the time to lift our nation from the quicksands of racial injustice to the solid rock of brotherhood. Now is the time to make justice a reality for all of God's children.

It would be fatal for the nation to overlook the urgency of the moment. This sweltering summer of the Negro's legitimate discontent will not pass until there is an invigorating autumn of freedom and equality. Nineteen sixty-three is not an end but a beginning. Those who hoped that the Negro needed to blow off steam and will now be content will have a rude awakening if the nation returns to business as usual. There will be neither rest nor tranquility in America until the Negro is granted his citizenship rights. The whirlwinds of revolt will continue to shake the foundations of our nation until the bright day of justice emerges.

But there is something that I must say to my people who stand on the warm threshold which leads into the palace of justice. In the process of gaining our rightful place we must not be guilty of wrongful deeds. Let us not seek to satisfy our thirst for freedom by drinking from the cup of bitterness and hatred. We must forever conduct our struggle on the high plane of dignity and discipline. We must not allow our creative protest to degenerate into physical violence. Again and again we must rise to the majestic heights of meeting physical force with soul force. The marvelous new militancy which has engulfed the Negro community must not lead us to a distrust of all white people, for many of our white brothers, as evidenced by their presence here today, have come to realize that their destiny is tied up with our destiny. And they have come to realize that their freedom is inextricably bound to our freedom. We cannot walk alone.

And as we walk, we must make the pledge that we shall always march ahead. We cannot turn back. There are those who are asking the devotees of civil rights, "When will you be satisfied?" We can never be satisfied as long as the Negro is the victim of the unspeakable horrors of police brutality. We can never be satisfied as long as our bodies, heavy with the fatigue of travel, cannot gain lodging in the motels of the highways and the hotels of the cities. We cannot be satisfied as long as the Negro's basic mobility is from a smaller ghetto to a larger one. We can never be satisfied as long as our children are stripped of their selfhood and robbed of their dignity by signs stating "for whites only." We cannot be satisfied as long as a Negro in Mississippi cannot vote and a Negro in New York believes he has nothing for which to vote. No, no we are not satisfied and we will not be satisfied until justice rolls down like waters and righteousness like a mighty stream.

I am not unmindful that some of you have come here out of great trials and tribulations. Some of you have come fresh from narrow jail cells. Some of you have come from areas where your quest for freedom

left you battered by storms of persecution and staggered by the winds of police brutality. You have been the veterans of creative suffering. Continue to work with the faith that unearned suffering is redemptive.

Go back to Mississippi, go back to Alabama, go back to South Carolina, go back to Georgia, go back to Louisiana, go back to the slums and ghettos of our northern cities, knowing that somehow this situation can and will be changed.

Let us not wallow in the valley of despair. I say to you today my friends—so even though we face the difficulties of today and tomorrow, I still have a dream. It is a dream deeply rooted in the American dream.

I have a dream that one day this nation will rise up and live out the true meaning of its creed: "We hold these truths to be self-evident, that all men are created equal."

I have a dream that one day on the red hills of Georgia the sons of former slaves and the sons of former slave owners will be able to sit down together at the table of brotherhood.

I have a dream that one day even the state of Mississippi, a state sweltering with the heat of injustice, sweltering with the heat of oppression, will be transformed into an oasis of freedom and justice.

I have a dream that my four little children will one day live in a nation where they will not be judged by the color of their skin but by the content of their character.

I have a dream today.

I have a dream that one day down in Alabama, with its vicious racists, with its governor having his lips dripping with the words of interposition and nullification—one day right there in Alabama little black boys and black girls will be able to join hands with little white boys and white girls as sisters and brothers.

I have a dream today.

I have a dream that one day every valley shall be exalted, and every hill and mountain shall be made low, the rough places will be made plain, and the crooked places will be made straight, and the glory of the Lord shall be revealed and all flesh shall see it together.

This is our hope. This is the faith that I go back to the South with. With this faith we will be able to hew out of the mountain of despair a stone of hope. With this faith we will be able to transform the jangling discords of our nation into a beautiful symphony of brotherhood. With this faith we will be able to work together, to pray together, to struggle together, to go to jail together, to stand up for freedom together, knowing that we will be free one day.

This will be the day, this will be the day when all of God's children will be able to sing with new meaning "My country 'tis of thee, sweet land of liberty, of thee I sing. Land where my father's died, land of the Pilgrim's pride, from every mountainside, let freedom ring!"

And if America is to be a great nation, this must become true. And so let freedom ring from the prodigious hilltops of New Hampshire. Let freedom ring from the mighty mountains of New York. Let freedom ring from the heightening Alleghenies of Pennsylvania.

Let freedom ring from the snow-capped Rockies of Colorado. Let freedom ring from the curvaceous slopes of California.

But not only that; let freedom ring from Stone Mountain of Georgia.

Let freedom ring from Lookout Mountain of Tennessee.

Let freedom ring from every hill and molehill of Mississippi—from every mountainside.

Let freedom ring. And when this happens, and when we allow freedom ring—when we let it ring from every village and every hamlet, from every state and every city, we will be able to speed up that day when all of God's children—black men and white men, Jews and Gentiles, Protestants and Catholics—will be able to join hands and sing in the words of the old Negro spiritual: "Free at last! Free at last! Thank God Almighty, we are free at last!"

Distribution statement: Accepted as part of the Douglass Archives of American Public Address (<http://douglass.speech.nwu.edu>) on May 26, 1999. Prepared by D. Oetting (<http://nonce.com/oetting>).

Permission is hereby granted to download, reprint, and/or otherwise redistribute this file, provided this distribution statement is included and appropriate point of origin credit is given to the preparer and Douglass.

